

前号より続く

◎明治5年(1872)

(12・-) 事業不振に信用不安も重なり、工場を二分し、製靴工場を自邸内(亀岡町一丁目14番地・現・都立台東商業高等学校内)に移す。先に兵部省武庫司より「10ヶ年間軍靴製造申し付け」の朗報を受けた弾直樹は、浅草移転を機に、月産1万足の増産計画を目論みましたが、すでに経営は逼迫した状態にあり、止むを得ない処置であったようである。また間の悪いことに、10ヶ年間契約の朗報も、「今後舶来靴を買い上げるようになった」という一方的な通報を受け、息の根の止まる大打撃を受けるのだから悲惨である。

◎明治7年(1874)

三井組総監督 三野村利左衛門との談合で、三井組監督 北岡文平の助力を得、事業の提携を話し合う。

(11・15) 三井組の資本が入り、経営の実権は北岡文平の手に握られ、社名も『弾北岡組』と改称された。弾の事業の支柱である「陸軍御用」も、『弾北岡組』がとって代わった訳である。

新会社の製革部門は、^{じかたはしぼ}地方橋場1373番地(現・荒川区南千住 東京瓦斯工場敷地内)に新設された。

事業は継続されたとはいえ、この時の弾の心の内は、無念の思いで、晴れることはなかったのではないだろうか。

◎明治8年(1875)

(1・-) 橋場町の土地建物とも、大蔵省より東京府廳に管轄が移り、同廳より直樹に拂下げとなり、次で北岡文平に譲與せり。

斯くて漸次直樹の負債も償却の運びとなり、明治9年12月中までに殆ど完済に至らんとせり。こんな文章に出会うと心安らぐ。

◎明治9年(1876)

仙臺鎮臺より軍靴背のう、馬具革具類の用途を命ぜられ、次で熊本鎮臺よりも同様の命に接す。従て十年の西南戦役に際しては大いに努むところありたり。

◎明治11年(1878) 明治14年(1881)

第一回内國勸業博覽會及び同14年の第二回博覽會にも出品せし製靴に對し、有功賞牌を受領する等着々秩序ある業績を示すに至る。

◎明治22年(1889)

(6・-) 仙臺支店の損失整理のため同地に赴き、その月歸宅せしも、7月に入りて病に罹り、醫療効を奏せず、7月9日午前10時、享年六十有七を一期として遠逝さる。



昭和6年発行の日本皮革時報社の記念号